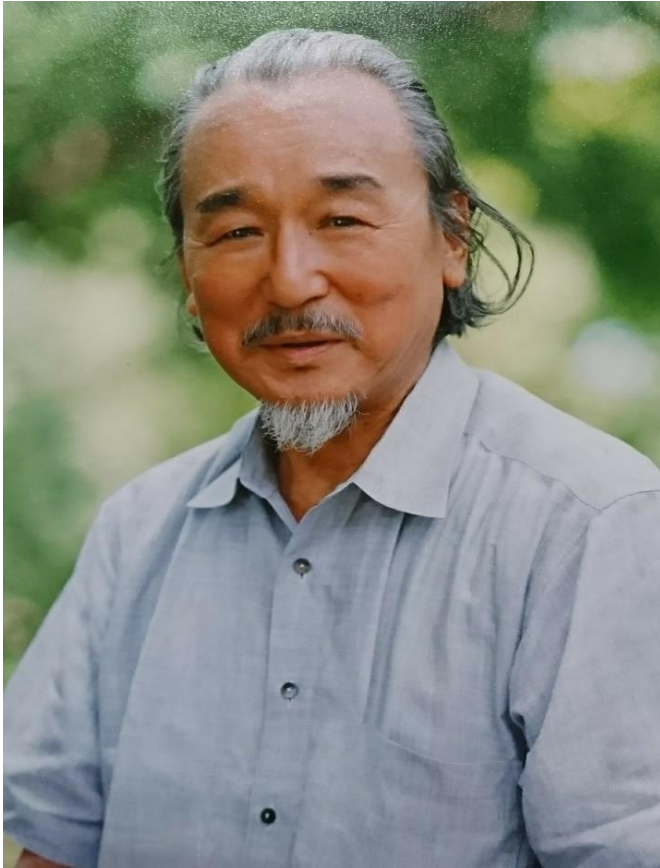


親父と沖縄とマンゴープリン



思えば、ここ1，2年

「父」とは濃厚な付き合いができたような気がする。父というとなにか他人行儀だ。親父と呼ばせてもらおう。

私が幼いころ、親父らしいことをしてもらった記憶がない。初めからいないものと思えば、別段寂しくもなかった。何度かキャッチボールをしてもらったことがあるが、あまりの下手さ加減に、愕然としたものだ。

そんな親父が、中学に入って間もない私を映画に連れて行ってくれた。タイトルは「沖縄決戦」。

戦争末期に捨て石となった沖縄の地上戦を描いた大作だ。砲弾によって兵隊や住民が死んでいくさまが、生々しく再現されている実にショッキングな映画だった。中学生になったばかりの私を、なぜあんな映画に連れて行ったのか。きっとそれなりに思惑があったはずだ。つい最近、長年の疑問を親父にぶつけてみた。「えっ？ そうだったかあ。覚えてないねえ」

そんな父親だ。

今日お集りのみなさんは、元気なころの親父をご存知だろうと思う。その後、衰えを自覚しながらも、それに抗い、自分の夢を追いかけようと最後までがいていた親父の姿を知ってもらうために、少し長いがお付き合い願いたい



親父は5年前、首の骨が細菌にむしばまれたために起きる頸椎化膿症で腰の骨を首に移植する大手術をした。

その麻酔から目覚めたとき、ベッドの横にいた私に呟いた第一声がある。

「沖縄にいる夢を見ていた。早く沖縄に取材に行かないと。本の題名も決まってる。『座間味の遺言』。それは同時に、俺の遺言でもある」

要するに、座間味の集団自決は、実は軍隊長の命令ではなかったこ

ひめゆりの塔の前で

とが明らかになってきたのだが、親父に言わせれば、軍の命令があったかどうかより、集団自決は、軍が駐留していたところでしか起きていないことをどうにか証明したいらしい。

だが、老いに伴う肉体や頭の衰えは残酷だ。

追い打ちをかけるように、2年前から脳血管性パーキンソンニズムにかかり、方向感覚や時間の感覚がおかしくなる。

夜中に電話をしてくいたり、駅まで出かけても道に迷って帰ってこられなくなる。なにより、四国遍路や山歩きで鍛えた足が不自由になったことがショックだったようだ。

ヨチヨチとしか歩けない。足元もおぼつかなく、よくこける。

だからといって、話ができないわけではない。
昨今の政治状況や社会の風潮について嘆いたり、
本や過去の取材で得た知識を披露する。
そして、高尾山をまた歩きたいこと。
沖縄の嘆きを伝えたいこと。
岩波新書の「ぼんやり」の続編ともなる「懶惰(らんだ)」の本を書きたいこと。
親父の夢は食欲だ。



国会前のデモに夫婦で参加

2015年夏。
国会周辺で安保法制反対
のデモが最高潮に達して
いたときだ。
デモを取材していた私の
携帯に、親父から電話が
かかってきた。
「デモを取材したい」
翌日の午前中、渋谷で待
ち合わせる。
お袋までついてきた。
デモの雑踏の中でノート
と鉛筆を握る親父。
デモで有名になったシー
ルズによるコールが始ま
った。
「戦争させない！」
「子供を守れ！」

脚が不自由なので、土盛りに腰かけていた親父だが、ラップ調のコールにつら
れてすっと立ち上がる。
前を向きながら小さな声でうなるように応じている。

「平和を守れ」

まるで念仏だ。

不戦を頂いた憲法によって平和が再生して70年。
そのことのありがたさは、

老夫婦となったふたりの遺伝子として私にも受け継がれている。

ふと、振り返ると、ふたりが言い争いをしている。

「だからキャンセルしろと言っただろう」

「こんなに遅くなるとは思わなかったから」

介護弁当のキャンセルの連絡をしたか、しないかで、喧嘩を始めている。

弁当と平和、

どっちが大事やねん。



沖縄へ向かう親父のお見送り

ここ数年、沖縄の米軍基地建設に揺れる、辺野古の問題に心を痛めていた。病に倒れ、パーキンソニズムにも侵された親父は、物忘れが激しくなり、歩くことも覚束ない。そんな親父が、どうしても沖縄に行くという。

「そんな状態で行けるのか」

そう言うと、親父は聞いたことじゃないとでも言いたげに、

「1日でも早く行かなきゃならないんだ」と、

人差し指を振りかざしながら、かすれた声で熱弁をふるう。

「向こうで何があっても、親父は本望なんだよ。行かせてあげよう」
反対するお袋を、そう説得した。

出発当日、実家のある駅まで迎えにいった。改札の前で、親父は探し物をして
いる。いつもの決まった光景だ。

先ほどチャージしたばかりの Suica をどこにしまったか、親父はすぐに忘れて
しまう。

改札を通るたびに、全身のポケットを探す。

「これから切符や大事なものは、必ずこの財布に入れると決めればいいよ」
そう言って私は買い直した切符を親父の財布に入れてポケットに戻す。

空港の手荷物検査場を通過するとき、親父は1度だけ振り返った。
左手を挙げる姿を見送るお袋は、泣いている。

「いつも喧嘩ばかりするんだから、しばらくはのんびり一人で居れるだろう」
そう言うと、

「長年連れ添った夫婦というものは、そういうものなの。あんたにはわからな
いでしょう」ふーん、そんなもんか。

現地では、沖縄タイムスの知り合いが、あちこちに付き添ってくれたらしい。
あれほど人に迷惑をかけることを気にしていた親父が、
人の世話になりながらも、沖縄で見たかったものって
いったい何だったんだろう。



それ以降、4回に
わたって沖縄を
訪れて取材をし
ている。

20歳の女性が
元米軍属の男に
殺害されたこと
に抗議する県民
大会を見に行っ
た親父が、
沖縄タイムスに
取り上げられた。
見出しはこうだ。

「元朝日新聞天声人語担当 辰濃和男さん」
「沖縄の状況『理不尽』」

帰京後、頭の中では書きたいこと、書くべきことがいっぱいあるのに、それを文字に落としていく作業ができない。
以前のように言葉がスラスラ出てこないもどかしさ。
心に体が着いていかないことに苛立ち、落ち込む。
家で荒れたことも一度や二度ではない。
お袋も、よく堪えた。

見かねた私が、「もうのんびり暮らしたらどう」と提案したことがある。
親父の答えだ。
「取材した沖縄のみんなが、私の本を待ってくれてるんだ。なんとか報いたいんだよ」



親父と1週間の沖縄取材旅行

そのころ、親父の病院によく付き添った。

廊下の椅子に座りながら、
「なんで、こんなになっちゃったんだろう」
頭を抱えながらつぶやく親父。
私はただ黙って、その背中をさするしかなかった。

午前中の検査を終えると、お腹が空いたようだ。
「この食堂のカレーが、なかなか旨いんだ」

ふたりで席につくと、やはり沖縄の話になる。
「米軍による犯罪被害者のリストがあつてな。ものすごい数の人が犠牲になっている」

私は少し意地悪な気持ちになった。
「書き尽くされていることだよ」

その言葉が、親父のプライドをえぐり、火をつけた。

急に大声をあげて机を叩く。周囲がシーンとなる。
「バカにするのか！ もう帰る！」

自分の仕事が否定されたと思った父の目が、怒りに震えている。

机を支えにフラフラと立ち上がる。
「親父、わかったから座れよ」
両腕を押さえて座らせようとするがおさまらない。
「放せ！」

廊下に出るが、暴れる親父が床に転んでしまう。抱き上げてソファに座らせる。

あまりに軽くて、片腕で足りる。

「息子なんだから、親父の気持ちはよくわかるから！」
「お前なんか、息子じゃない！」
二人の激しいバトルの声を聞いて、看護師たちが集まってきた。
「大丈夫ですか？」
それでも、親父はおさまらない。
「放せ！」
親父の肩を抱き寄せながら、
「親父、わかったよ、わかってるよ！」
私の声も1オクターブ上がっていく。

だが、次の言葉で、親父の体の力が抜けていくのがわかった。

「親父、悔しいよな。俺も悔しいよ」

日々衰えていく自分が、書けなくなる恐怖と闘っている。

その悔しさ。

見ると、親父は泣いていた。

私も涙が止まらなくなる。

遠巻きにしていた看護師たちも、涙を拭いながら立ち去っていく。

親父の左手が私の右手に重なった。

「わかったよ。わかったよ。恥ずかしいから、先に席に戻ってくれ」

私はオムライス。親父はカレーを無言で食べた。

紙ナプキンで涙をふく以外は、2人ともずっと、うつ向いて。

信じることにするよ。親父の底力。

運命とは、本当には残酷だ。

今年に入って、

親父はとうとう自力では歩くことが困難な状況に追い込まれていった。

そんな親父を連れて今年4月、私は二人三脚の取材旅行で沖縄を訪ねた。

幼いころ、親父に沖縄決戦を見せられて以来、

私は戦後50年の取材を境に、毎年沖縄の地を訪れている。

時代に翻弄されている沖縄の民意をどう受け止めるか。

親父の見る沖縄と、私の見る沖縄とは少し違うかもしれない。

そのことを、親父と一緒にの行脚で確かめたかった。

レンタカーを借りて南部の戦跡や北部の米軍基地を巡る1週間の滞在だが、

家ではあれだけ寝てばかりいた親父が、車内では1度も寝ない。

車窓を過ぎる風景を記憶とともに辿りながら、

風土や文化、人々の暮らしぶりについて語る。

沖縄ののどかな海沿いを、車いすで散歩しているときだった。

風いだ海の上を穏やかな風が吹き抜けていく。

車いすの親父がつぶやいた。

「ふざけんなよ」

その場にそぐわない激しい言葉に「なに？」と聞き返すと、

もういちど、「ふざけんな！」
そう言うと、肩を震わした。
こんな平和な光景が、アジアの軍事基地として存在し続ける不条理に、
泣いているのだ。

泣いた後でも、食欲は旺盛だ。
ホテルでバイキングの朝食を腹いっぱい食べたはずなのに
昼近くなると、もう「腹が減ったな」と訴えてくる。
ひめゆりの塔に寄った帰りに、脇の蕎麦屋に入った。
ソーキそばを注文して、しばらくすると、
自分で手を挙げて店員を呼ぶ。
「マンゴープリン、追加！」
おいおい、蕎麦屋でマンゴープリンかよ。
しかも、自分だけ。

親父はこの旅で、自分で沖縄の本を書くことは諦めたようだ。
いわば、けじめの旅となった。

その後、急速に病状は悪化した。
7月、軽い脳こうそくを起こして入院した。
あれだけ食べることが好きだった親父の食が細くなっていく。
意識がもうろうとして、
日によっては呼びかけにも応じない。

10月末だった。
天声人語を書いていたところに補佐を務めてくれたKさんが
病床を訪ねてくれた。



耳元で声を掛けると
初めは怪訝な表情を
浮かべていた親父が、
突然「オー！」と言っ
て半身を起こして、手
を差し出した。
Kさんは続ける「辰濃
さーん、沖縄の人たち
が待ってますよ！
ちゃんと食べて、元気
になって、また沖縄に
行きましょう！」と語

り掛ける。

親父は「ウン、ウン」と頷きながら、何粒もの涙を流す。

今年12月、私は沖縄の辺野古にいた。
あのとき「ふざけんな！」と怒りをあらわにした親父に
辺野古の写真を見せれば、
もしかして。

帰京して病院を訪ねたのは12月6日、
意識のほとんどない親父の薄く開かれた目の前に辺野古の写真をかざしてみた。
「沖縄の海だぞ！」
耳元でそう叫ぶと、
親父の焦点が写真と合った。
明らかに、見入っている。
左目から、涙が一滴だけ流れた。
ほんの数秒のことだった。

その2時間後。

親父は息を引き取った。



天使の梯子

この写真は、沖縄の旅で眼下に広がる海と、

雲の間から降りる天使の梯子を眺める車いすに乗った親父の後姿だ。
いつまでも、いつまでも。
そこにいた。
寒くないかと尋ねても、
「大丈夫」
30分以上はいただろうか。
そして満足そうに呟いた。
「堪能した」



沖縄南部で女子学生らが身投げした崖で、親父はいきなり立ち上がった

親父の好きな言葉の一つに「懶惰」がある。
ぼーっと気の向くままにぼんやりしていると、心にゆとりとか、余裕とか、余白が生まれて、大自然の移ろいを受け止める感性が研ぎ澄まされる。
生きる力が泉となって湧いてくるというのだ。

やはり親父は、最後まで生きることにこだわっていたように思う。
まだまだ取材をしたい。
まだまだ書きたい。
そういった記者としての魂に揺さぶられ、
それが叶わない肉体、頭脳に落ち込み、
以前と変わらぬ旺盛な心で、慟哭していた。
こんな残酷な時間が、人生の最終章に訪れるとは、
本人も思っていなかっただろう。
そばで見ていた私は、辛かった。

いま亡き親父の部屋を整理している。
足の踏み場もない乱雑な部屋の段ボールの中からメモが出てきた。
沖縄の本を書くための柱立てが書かれている。
何枚も、何枚も。

あとほんの少しだけ、時間があつたとしたら。
ほんの少しだけでいい。
時間があつたなら。
渾身の力で、いまの沖縄を描けたかもしれない。

最後まで「書き続けよう」ともがいた親父は、
やっとならでペンを置くことができたのだと思う。

親父、そのペンは、おれが引き継ぐことにするよ。
あの世で、好きな沖縄舞踊を鑑賞しながら、場違いのマンゴープリンでも食べてくれ。
ありがとう、親父。